
エリシオン魔道法学園

パロパロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エリシオン魔道法学園

【Nコード】

N6832H

【作者名】

パロパロ

【あらすじ】

魔法と剣術を教えてください！？それは行かなきゃ！エリシオン魔道法学園へ。ようこそ、我が学園へあなたが6年間死なずに無事で居れます様に アーメン and 南無阿弥陀仏！

ぶろろーぐ(前書き)

サウムアレイコム

ぶるるーぐ

「おお！ここがエリシオン魔道法学園か！？すげえーでかいな！！」

俺の名は紅・蓮、^{コウ・レン}今年15歳になったばかりの気さくな少年だ。
宜しく！！

つて、ここが何処か説明していなかったな。ここはエリシオン魔道
法学園と言って、
エーシヤス大陸のほぼ中心地にある魔道都市エリシオンにこの学園
はある。

学園は主に魔術師と戦士を育成する機関であり、大陸中から魔術師
や戦士として
才能を持っている者を一箇所に集め、それをさらに選別し選りすぐ
った。

少数の者達だけを訓練する場所で、卒業後はある一部の特例を除い
ては全ての生徒が
3年の間、国家に労働と言つ形で奉仕しなければいけないんだ。
まあ、俺がここに居るのは優秀だからってことだな！！

「きゅーうう！」

おっと、こいつの事を忘れていたな。今俺の頭の上に乗かっている
象牙色のウサギは、
クレイブって言って俺のペットであり相棒なんだ。こんな可愛い姿
はしているけど、
戦闘になるとクレイブは様変わりするんだ。何がどうなるかって言
うのはお楽しみに
取っておいてくれ。

「二ついつ時は校舎裏がくさいよな！よっし！行ってみよう！..」

「そこに居る少年！そっちじゃない、受付はこっちだよ。」

「ん？」

校舎裏に行こうと足を踏み出した途端、後ろから声を掛けられた。

「振り向くと、そこに居たのはもやし男だった。」

「言葉に出ているよ、もやし男って.....、正直な子だね、君。」

どうやら、考えていた事をそのまま喋って目の前の男に言ってしまったみたいだ。

これからは気をつけよう。俺は心の中でそう誓ってから、もやし男がいる方へと

向かうと、もやし男の他にも俺と同じような年齢の受験者だろう人達と、

その受験者達に番号の書いてある名札を渡している人達がいた。

見たところ何かの受付をしているようだ。

俺がその光景をじっと見ていると、それに気づいたもやし男が再び声を掛けて来た。

「君は受験生だろ？後数分で受付を終了してしまうから、今済ませておかないと

試験を受けられないよ。」

「マジでか！？受付って、どうすればいいんだ？」

「あー、それならここに君の名前と年齢、性別、血液型を

ここに記入してくれるだけでいいよ。」

もやし男はそう言つと素早く数枚の紙とペンを取り出し俺の前に出すと、

その中であつた、記入用紙の説明を始めた。うん、そうかこことこ

ここに書くんだな。

俺が言われた通りに記入用紙を埋めると、それを見ていたもやし男がその用紙を手に取り内容を確認し言った。

「はい、オツケーです。じゃあ、これが君の受験番号だよ。見えやすい所に

着けておいてね。」

「ああ、了解。」

そう言うと俺はすぐに名札を付け始めた。

ぶるぶるーぐ（後書き）

アラビックで御機嫌ようって感じの意味だそうです。

【第1話】世話のかかる家畜

受付で貰った名札と学園の地図を受け取り、それだけ言っと踵を返しそこから離れて

行こうとする俺に、なにか思い出したようにもやし男が声を掛けてきた。

「そうそう、あと試験は13時から開始されるから、その時間の10分前には

向こうのグラウンドに居るようにね。」

もやし男の声に振り返り、手を振ることでそれに答えてから、それまでに昼飯を済ませておこうと思いき、購買に向け足を進めることにする。

えーっと、もやし男から受け取った地図を開き、購買の位置を確認する。

購買つーうか、売店は西校舎一階の端だな。西校舎は、今居るところが

ここになるから、あれか!!

やめてください!!一人で行けますからと、何度も言っているでしよう!?

「ん?なんだ、喧嘩か!?

俺が購買に向け一歩踏み出すのとほぼ同時に、近くに居た五人組が言い争いをしている様だった。見てみると一人は可愛い女の子で、残りの四人は男のようだった。つまりは逆ハーレムだ。

「なんで？いいじゃん、君は魔法使いだろ？」

「ああ、俺達戦士と組んだほうが力を存分に発揮できるだろう？」

「そうそう！！ここの試験は下手をすると命を落すほどに危険なんだぜ？」

守ってやるって、そう言っているのがわかんねーのか！お前！！」

「やああー、毎年ああいうのが絶対に、何人かは居るんだよね。

可愛そうだね、あの子。」

俺がその五人組を呆然と見てみると、さっきのもやし男が気配も感じさせずに、

いつの間にか俺の後ろに立って居た。うーん、こいつ見かけ通りのもやし男ではない様だな。

これからは見かけだけで人を判断するのは止めよう。

そうまた心に誓ってから購買に行こうと、俺が足を一步踏み出した途端、

再度もやし男に声を掛けられた。

「あれ、彼女を助けてあげないんだ？」

「何で俺が？俺は人見知りだから無理だな、とても繊細なんだ。

そう思うならあんたが助けたらどうだ？ここの関係者なんだろ。」

「ダメなんだよ、弱き者は学ぶに値わずって事で、これも試験の一環らしくてね。」

「なら、仕方ないな。そう言う事だし腹減ったし、俺はもう行く。」

そう言っただけで今度こそ昼飯ゲットの為、購買に向かおうと歩き出した途端。

視界の隅に、女の子が見慣れた感じの象牙色の小動物を抱いているのを

見つけてしまった。・・・まさか、おいおい！？何やってんだ、く

れいぶうう!!?」

「ん　っ、確かにクレイブだな。あいつ!!!何をしているんだ!?!」

「きゅっーうう!きゅっーうう!きゅっきゅいーうう!きゅーうう!!!!」

どうやらクレイブは、絡まれている女の子を助けようとしているようだ。

その為か女の子の胸に抱きしめられながらも、目の前に佇む四人の男達に

向かい呻っている。

あいつ!だから俺を置いて一人で先に行きやがったんだな。

「ちっ!ホントにつ!!!世話のかかる家畜だな!!!」

俺はそう言うと、再び踵を返し、その五人組のもとへと歩き出す。

その俺の姿を見てどう勘違いしたのか、もやし男が、俺に向かい聞こえるか

聞こえないような微妙な声で呟いた。

「ふっふ、素直じゃないんだね。」

俺はその言葉に反論することなく聞き流し、五人組のところへ歩いて行くと、

それに気づいたクレイブが、俺に向かい先程よりも大きな声で鳴き始めた。

それに気づいた男達がこちらに振り返り俺に気づくと、万全な体制で俺を出迎えてくれた。馬鹿野郎!!!気づかれちゃったじゃないか!!!背後から男達を一撃の下に叩きのめそうと言う作戦が台無しじゃない

いか!?

「なんだよ、お前?」

「なに?もしかして正義のヒーローとか気取っていたりして!？」

「はは、っは!!それマジでダサくねえー?」

「ダサイ、ダサイ!」

「きゅーーう!!」

その男達の声聞き、クレイブがそうだ!と、肯定するように大きく

一鳴きする!

俺はとりあえず、思いつきで話し合いで解決してみようかと思い、男達にそれを言おうと、話し出そうとした途端、男の一人が俺の胸倉を掴み上げ睨み付けながら言った。

「なに無視してんだよ!?やんのか?」

「ふうー!」

俺はそこに居た男達全員に聞こえるように盛大に溜息を吐くと、俺の胸倉を

掴みあげている男の鼻っ柱に、ヘッドバッドを咬ましてやった!!そして男達を小馬鹿にした様に言ってやる。

「話し合いで解決しませんか?」

【第2話】紳士的で的確な言葉

「話し合いで解決しませんか？暴力はダメです。」

「……ふざけんな。」

俺の紳士的で的確な言葉に、何故か残りの三人が一斉に俺に剣を抜き攻撃を

仕掛けてくる！！

一人は正面から振り下ろすように、もう二人は左右から横なぎを仕掛けてくる。

ヘッドバットを受けて倒れている男から剣を拝借すると、俺はぎりぎりまで

男達を引き付け後方に飛びのいた。

そうすると男達は俺のいた所に剣を振り、近づいて来ていたお互いをお互いに

仲良く切りあった。

「……ぐっつあぁあ！……！！」「」

次の瞬間、三人の男達が合わせた様に悲鳴を上げる。うわぁあ、痛そうだな。

……幸いと言うか男達は少し縫えば直るだろうと言う程度の傷だけで済んだ

様だったが痛いものは痛いらしい、そこにさっきのもやし男が駆けつけ

治療するから来なさいと言うと、男達は素直にそれに従いもやし男に連れられて行った。

うん、連携は一朝一夕では出来ないって事だな。俺も気をつけよう！

そう俺が黙考しているとクレイブを抱えた女の子が俺の方へと、小走りに駆け寄ってきた。

「あの、ありがとうございます!!」

「いいよ別に、それ返してくれ。」

「きゅーーっ」

俺はクレイブを連れ戻しに着ただけで、女の子を助けに来た

訳じゃない。礼を言われる事なんかしていないからな。うん!!

俺は彼女に抱かれているクレイブの首を掴まんで取り返す。

クレイブは首を掴まれるのが嫌いだ、いつもならこんな持ち方はしないんだけど

今日は俺を放って勝手に行動した罰として、首を掴んでやった。

俺の手から逃れようと必死に暴れるクレイブを片手で掴んだまま、

今度こそ

昼食ゲットの為、西校舎に向かう。

女の子が何か言いたそうな顔でこっちを見ていたけど、まあ、良いか、

言わないって事はそんなに大事な話でもないんだろう。

【第3話】食堂のトロール

「へえー、馬鹿でかい食堂じゃん。この学校の生徒全てがここで飯を食べているのか？」

西校舎一階の端にある食堂はとてつもなく広く、テーブルやイスが数え切れないほど置いてある。そして、その半分以上はもう学生に占領されていた。ざっと四百人位は居るんじゃないか？

その光景を横目に見ながらも俺は、食堂の中ほどにある購買に向かった。

購買には、生活用品、飲食物、学業品、武器防具と、幅広く取り扱っている。

俺はその中の飲食物のところでも適当にパンをいくつか買い購買のすぐ近くに

空いている席を見つけるとドツカッと腰を下ろすと、片手で摘み上げた

クレイブをテーブルの上に放してやった。

ちょっと、あの子、この学園の生徒じゃないよね？

そうだね、あっ！！しかも、あの子が座って居る所って！！？

だよな？どうする、言っておいたほうが良いのかな？

まったくクレイブのせいで、無駄な時間を過ごしてしまった。

でも、そろそろ許してやろう、なんか、すごく反省しているみたいだし　って

さっきから何なんだよ！？

俺何か悪い事でもした？すごく周りの視線が痛いんですけど・・・

しかも何かこっち向いて、ひそひそ話ししないでくれる？俺そう言うのって
すごく気にしちゃうんだよね。
あっ！なんか今、あのローブを着た女の子、目、背けた？嘘！？
マジで凹むんだけど、それ。

ポット！

「きゅーっ？」

俺はあまりの出来事に、食べかけていたパンをテーブルに落してしまっ
た。

そんな俺を見てクレイブは不思議そうに一つ鳴くと、その俺が落し
たパンを

小さな口で食べ始めた。

俺はそんな事に気づく暇もなく、俺から目を背けた女の子を凝視し
ていた。

「おい！」

「……………」

「おいっ！お前！！？」

「ん？誰、あんた？」

一人物思いに耽っていた俺の肩を強く握り締め声を掛けて来たのは、
身長二メートルくらいのローブを着た巨躯の男だった。人間か？
これ、この体格は人間じゃないよな。

「えーっと、こ・と・ば・わかりますか？」

「はあ！？馬鹿にしてんのか！！？俺が誰だか分かってるんだらう

な？」

「いや、俺はトロールに知り合いは居ないんだけど……。」

「俺は！……？トロールじゃない！！人間だ！？」

「あつ！ごめん！じゃあ、ハーフか何か？」

「人間だとっ！！言っているだろう！！？」

トロールは皆、そう言うよ。……って、言わないか、冗談だよ。そんなに怒るなよな。

ほら、周りの皆があんたに驚いてテーブルとイスごと、俺達から離れていくじゃないか、何か離れた後、俺達を囲むように、テーブルを置くと

観戦し始めたけど……。

ファイト・リングみたいに見えるのは、俺の気のせいなんだろう？

「良い度胸しているじゃないか？ここに座るって言う事が、どう言う事が

わかってているのか、お前？」

「あーごめん、俺、占いとかが興味ないから、じゃっ！そう言う訳で
！！」

俺は爽やかに男に対して微笑を浮かべると、男に手を振りながら歩いて

行くこうとするも男が俺の前に回りこんできた為、行く道を塞がれてしまった。

「いやっ！占いは良いって！？」

「誰が占い師だ馬鹿野郎！！！」

「ここは俺様の席だ。この学園に居るなら知っているんだろう？」

「知らん！！と言う訳で、ここでお暇致します。」

とりあえず、目の前のトロール男に深々と一礼してから、その場から静かに撤退しようと、テーブルの上で、俺のパンを食べ終わり、食後の昼寝を始めたクレイブを掴み頭の上に乗せ、歩き出そうとした途端、トロール男の丸太のような腕が俺の行く手を阻んだ。

ドゴーーーーン!!!

「……………、暴力……………反対だったりしませんか、お兄さん？」
「あーっん？大賛成に決まってるだろう!!!」

【第4話】食堂のトロール(その2)

「……、暴力……反対だったりしませんか、お兄さん？」

「あーっん？大賛成に決まってるだろうー！」

トロール男はそう言うと、再度、今度は俺の顔にその照準を合わせ、上から殴りかかってくる。

ドゴンー！！

「うおっ！！俺、反対です！！話し合いましよー！！お兄さん！？」

「うるせえー！！聞く耳もたん！！」

ドゴンー！！

「やっぱり！人語は理解しにくいですか？俺、トロール語ですよね？？」

少しわかるんで、そちらで話しましょうか、トロールお兄さん！！」

「なめんなあ！！！！クソ餓鬼！！」

ドゴン！ドツゴン！バス！バス！！

トロール男もとい、トロールお兄さんは、俺の話聞く耳を持ってないそうです！

何処かに落してしまったのでしょうか？こつも話し合いで解決しようよ、

俺が奮闘しているにも関わらず、攻撃の手を休めてくれる事も無さそうです。

すごい！あの子！あの攻撃を、紙一重で全てかわしているわ！！
嘘だろ！？何者だよ、あのガキ！！？

何の騒ぎですかこれは！？あれは、スチーム・ロンクス君？つと
もう一人は
あつ！また、あの子ですか！？

まったく！！なんて所なんだ、ここは！？こんなに純真で、巷の奥
様方からも

『あの子は特別』とまで言わし占めたこの俺が！
トロールに襲われているって言うのに！！皆、助けてもくれないの
か？

俺このままじゃ、確実に滅ぼされるよ！？

見て！あの子、まだまだ、余裕があるみたいよ！！
こつち向いてウインクしてきたわ！！

あつ！ホントだ！！

何だよ！？これだけ助けて光線送っても、誰も助けしてくれないのか？
世の中冷たい人間ばかりだな。まあ、俺も困っている人を助けた
ことなんて
無いけどさ……。と言うことは、自分でどうにかするしかない
と言う事か！！？

「うーん、いつたいどうすれば良いんだ？」

「んなもん！決まってるだろう！？その椅子みたいに、俺様に壊さ
れれば

良いんだよ！！」

「その意見は、現在受け付けておりません！」

「……………つち！いい加減逃げ回るのも！！お・
わ・り・だ！！」

「波動連打!!!」

攻撃がやんだと思いきや、トロールお兄さんは突然、腕まくりをす
ると、

大きく一息吐いてから、俺に向けて今までの数倍のスピードで突進
してきた!!!

そして手が届く距離まで来ると、大声で技の名前を言い、鬨気を纏
った拳を

放ってきた。これは避けきれない!!!

「クレイブ!!!我切望するは、鋼鉄の盾!!!!!!」

ドツドツドツドオーン!!!!!!

「止めるんだあ!ロンクス君!?彼はこの学園の生徒じゃ無い!!!」

「エルランス先生?.....おせえよ、言うの。もう、
やっちまっただ後だぜ?」

痛たたたっ!痛い、無性に痛いぞ!!!背、背中に鍋の取っ手がめり
こんどる!!!!!!

厨房の中まで吹き飛ばされたのか.....、なんて力をしているん
だ!

あのトロールは!!!!後ちょっと、クレイブを盾に変化させるのが
遅かったら

俺のビューティな顔に傷がつく所だったな。

ポッオン!

「きゅーう?」

「ああ、クレイブ、お前がいなかったら、俺は傷物になってた。あ

りがと。」
「きゅーー!!」

クレイブの変化が解け、普段のウサギの姿に戻ると、俺はそのクレイブの頭を
撫でてやりながら礼を言っておく。それを聞いてクレイブは誇らしげに一鳴きすると
いつもの特等席、俺の頭の上に乗って来た。そうこうしていると、食堂の方から
声が聞こえてきた。

……聞いたことのある声だな。

「何てことだ！早く治療しないと!? ロンクス君、手加減はしたんだろうね!？」

「それは勿論。俺もそこまで鬼じゃないからな!」

ん? あれはさっきのもやし男だな。ほう、さっきのトロールお兄さんは、

ロンクス君と言う名前なのか、よし、脳裏に刻み付けておこう。

「えーっと、さっきの君!? 大丈夫かい? 意識があるなら声を出してくれるかな!?
治療してあげるから。」

「そうか? でも、何処も怪我していないから、良いって感じたな。」

嘘でしょう!?! あんな攻撃を受けて平然としているわよ! あの子
!?!?

これは、また、色の濃い奴が入ってきたな。

そうだね。楽しくなりそうだよ。

化け物かよ!?!?

食堂の中に居る大勢の視線、その全てが今俺に向けて注がれていた。中には小さく拍手しているような奴までいる。

どうやら俺がああ、のロンクスとか言うトロールの攻撃を受けて無傷で立っている

事が余程凄い事であるようだった。だが、それに一番驚いているのはトロール

お兄さん自身の様で俺を見て考え込み間を置いてから言う。

「おいおい、マジかよ!?俺の腕が鈍ったのか?.....俺もまだまだって事が。」

「んっ!!嫌々、自身を持ちなさい。人語が達者に話せるトロールなんてそうは

いないよ。ロンクス・トロール君!!」

「デメエ!!まだ、言うのか!!」

「ロンクス君!!止めないか!君も、人をからかうのは止めないか!!」

「っち!!今度、その言葉言いやがったら、唯じゃおかないからな!!」

「そう言ってトロールお兄さんは、走って行ってしまった。」

「君、懲りないんだね・・・、言葉に出ているよ。それから、あと2分程で、

入学試験が始まるというのに、こんなところに居て大丈夫なのかい?」

「何!?今何時だ!!もやし男!!?」

「はあーあ、今は12時58分だよ、それと、僕はエルランスだよ。これでもこの教師で　　って!!もういないか。」

【第5話】 ナイスで素敵な巫女服

走れ！走るんだ！！馬車馬の如く！走るんだ！！俺！！！！
えっ！？なんでこんなに急いでいるのかって、それは簡単だ！

今俺は、世界的に有名な、エリシオン魔道法学園と言う、魔道士や戦士などを

育成する学園にいるんだ。

俺はこの学園に入る為に入学試験を受けにここに来たんだが、この学園は構内に

トロールを放し飼いしている様で、それに絡まれて、やり過ぎたと思ったら

既に試験開始の2分前だったんだ。こりゃあ慌てるだろ？と言うわけに急ぐぜ！

「えー、これで入学試験の説明が終わります。」

「それでは、各自、パートナーを選び、13時30分にはここから北にある。

祠の中に入り、証を手に入れてきて17時には受付に提出してください。

では解散！！」

パートナー？祠？北にある？何の事だ！！？遅れてきた者にもちゃんとわかる様に

説明しやがれ！！まったく、最近の奴はけしからんな！！

「よし！クレイブ、俺は何をして、何処に向かえばいいんだ！？」

「きゅっっ」

「なんだ、お前！話を聞いていなかったのか！？何て奴だ！！すいません！」

こいつ、話を聞いていなかったらしいんです！もう一度、話してや
つてよ！？」

俺は、技とらしく、周りの人間に聞こえる様に声を上げると、
話を聞いていなかった、クレイブの為に親切にも、さっき他の受験
生達に
話をしていた、偉そうなオツサンに声を掛けた。

「ほら、お前も自分で言えよ！！」

「きゅう！！きゅー！きゅっきゅー！！」

なんだ？一人前に俺に反論しようってのか、コイツ！！まあ、コイ
ツの言葉を

わかる人間なんていないしな。オツサンもこれで誤魔化せるだろう。

「こいつもこう言っているんで、話してやってもらえる？」

「……君は知っているだろうが、この世の中は広い。中に
は動物の言葉が話せ

理解できる者も多くいる。その事を、『ビーストワード』と言うら
しいが

君もその口かね？」

「よ、よく分かったな！！そうなんだよ！だから教えてやってくれ
ないか？」

「そうだな。」

「ああ、頼むよ！！」

「……、学園の備品を壊したそうだね。コウ君？それに話
を聞いて

いなかったのではなく、時間に間に合わず、遅刻したと言うのが正

「解だろうか？」

「な、なっ！！見ていたのか、オッサン!？」

「・・・何はともあれ、私は一度言った事を二度も言わなければ理
解出来ないような者は

この学園に必要なと思うが、・・・どうだろうか、コウ君。
」

「も、も、もっもちろん、そうでしょうね。」

「うむ、判ってくれたかね。では、君には期待しているよ。」

そう言うと、オッサンは俺に背を向け、歩き去ってしまった。

「そうか、あのオッサンはその『ビーストワード』とか言う奴なん
だな。

だから俺が遅刻してきた理由が分かったのか・・・。

ともなれば、それをぼろぼろと喋った奴がいるんだろうな、なあ!?
ク・レ・イ・ブ・くん!?!？」

「きゅーっ」

「この野郎!!クレイブのせいだぞ!!」

俺はそう言うが早いか、その場に屈むと逃げようと俺の足元に飛び
降りた。降りました。

クレイブの尻尾を足で踏み、そのまま手を耳に移動させ、クレイブ
の長い耳を

両手で掴み、ピッピッと引っ張ってやった。これは、クレイブが二
番目に嫌いな

触り方だ。嫌々するように首を振るが、俺が放さないため、その行
動は無駄だ。

この野郎!!裏切り者め!!

「あ、あの!!すみません!？」

「うおっ！！クレイブ！？お前喋れたのか！！しかも、女みたいな声で！？」

「きゆう」

「きやつ！また、逢ったね。ウサギちゃん」

クレイブがいきなり話し出したと思い、驚いて俺がその場で尻餅を
ついている隙に

クレイブは俺の手から逃げ出し、俺に近寄って来ていた女の子の胸
に飛び込んで

行った。なんだ、コイツ？まあ、聞いてみるか。

「誰だ、あんた？って、ああー、さっきの五人組の一人か？」

「えっと、その、あの人達と一括りにするのは、あの、止めてもら
えます？」

「じゃあ、クレイブを盗んだ女。」

「それも、止めてください！この子は絡まれている私を助けてくれ
ただけです。」

「……………で、あんたは一体誰なんだ？」

「あ、は、はいっ！私はイザース・ミシユケットと言います。」

「イ、イ、イッイッイスと、よ、呼びましてくだちやい。」

何を言っているんだこいつ？

「クレイブ、行くぞ。」

「あ、あああ！待ってください！！私、さっきの話、全て覚えてい
ます。」

「ホ、ホントか！？よし、話を聞いてやるう、さあ、話せ。」

「……………ハ、ハイ。だから、一緒にい、い、いきっ行きませ
・んっか！！！」

「お前、何を言っているかわからん？まあ、そんなの後だ！
とりあえず知っている事を全て話せ！」

うん、そう言う事か、ここに居る受験生中から好きなのを選んでペ
アを組んで

ここから北に行った森の中にある洞窟の奥に行くと、祠があるから
その中から

鷹のエンブレムを取ってくればいいと……、そう言う事か
！！

よっし、なら早速一人選ばないとな。

おお！？あそこにいる屈強なお兄さん達なんか良いんでないかい？

「おい？あんたに決めた！俺と洞窟に行こう！」

「……、お前は魔法使い？神官？それとも盗賊か？」

「俺か？俺は戦士だ！！あんたも戦士だろう！？一緒に暴れようぜ
！！」

「話を聞いていなかったのか？それとも、ただの馬鹿か？」

なんなんだ！？せつかく俺が誘ってやっていると言つのに！馬鹿か
？だと！？

こんな失礼な奴となんか組めるか！！もっと、礼節を重んじる奴を
探そう！

えーっと、他に良さそうな奴はつと……。。。

「あのつつ！！わ、私つと！！組んでっ下さい。」

「おお！！君！良い！！良いよ！ナイス巫女服じゃん。俺と祠行か
ない？」

「……、君は戦士？」

「そつだよ！！俺結構強いよ？さっきもトロールと一戦交えたし！
！」

「胡散臭い、大体、この学園にトロールなんか居ないわよ。居たとしても、

武器も持っていないのに……、って、もう良いわ、さよなら。」
「あぁーっ！待って！！！」

何故に！？俺ってそんなに魅力ゼロ？うわっ！もう殆ど祠の方向に
かってない？

もしかして俺、売れ残り！？やばい！！このさい何でも良いや！！
さっきの女の子は何処行つた！？おっ！？居た！

「わ、わわっ！つわたし！で、いつ、良いん・ですか？」

「良いよ、僕も魔法使いだけどさ、上手く戦えば祠まで行って帰っ
て来られるよ！だから一緒に行こう？ね」

「はっ！はいい！！お願いします。」

「うん！じゃあ、行こうか？」

「きゅっっ？」

「……………行っちゃった。」

俺がそう言っている間に、あの絡まれていた女の子は青い髪の眩し
い、

男の魔道士に連れて行かれてしまった。って！気づくと、残ってい
るのって

俺だけじゃん！？何だよ！！ペアを組めって言ったくせに！

俺の相棒は何処にいるんだよ！！……なんか、すごい寂しい
んですけど。

「……………。」

「きゅっっ？」

【第5話】 ナイスで素敵な巫女服（後書き）

正直、内容ボロボロですね。

でも最後まであきらめません！

やりきります！

【第6話】その男！！受験番号298（前書き）

誰か読んでますか？！？

読んでたら感想頂けませんか？！どうぞ！？

【第6話】その男！！受験番号298

中央校舎三階の職員用個人部屋302と、プレートが貼ってある扉の部屋の中で、

二人の人間が言い争っているようだった。

一人は真っ白のローブを着た青白い肌をした男、もう一人はニメートルを

ゆうに超える長身の黒いローブを着た、巨躯の男だった。

「この俺様が、受験生の引率！？」

長身の黒いローブを着た巨躯の男が、もう一人の真っ白のローブを着た

青白い肌をした男の座っている机を力一杯、叩きながら言う。

「文句は言えないんじゃないかい？学園の備品をあれだけ壊したんだ。

本当ならもつと酷い罰でも可笑しくはない。

そうだな、一日ミスミくんの実験の手伝いとが、そうだろうロンクス君？」

どうやら、黒いローブを着た巨躯の男はロンクスと言うらしい。

そのロンクスに向かい、もう一人の白いローブを着た青白い肌の男は引きつった笑みを浮かべながらも、平静を保つように落ち着いた声で言った。

「ぐっ！わかった。今回は俺が悪かったし、な。学園の生徒じゃない奴に手を

上げちまったんだから、仕方がない。」

「は、はは。学園の生徒にも手を上げてはいけないよ。」
「ああ、それは考えとくとして、その俺が引率する受験生は？」
「グラランドに行けば分かるそうだよ。」

「おいおい、勘弁してくれよ？受験生って、お前の事かよ!？」
「ブツ、ブツブツツ、どうせ俺はいつも一人きりさ、オンリー口
ンリーっさ!!」
分かっていたんだよ！ホントは………ブツ…ブツブツ…
………。」

「おい!？そこに見えない友達でも居るのか？お前!？」
おいっ!!聴いていんのか!？受験番号00298!!!？」

「きゅう!!!？」

俺が一人、グラランドの中心で孤独を満喫していると、不意に肩を掴
まれ
大きく揺さぶられた。それに合わせてクレイブも俺にしっかりしろ
つと
言うように鳴くが、俺は今それと頃じゃないんだ!？止めてくれ!
もうそつとしておいて!!?俺もうHPゼロです。瀕死です!瀕死
なんです!!!

「いいんだ、俺、友達、いないし……。」

「はああ!？うんな事知るかよ!？とりあえず立てって!!おいっ
!!!!

泣くなよ!!!？」

「放つといってくれ!!?俺にはと・も・だ・ち・がっ!!!いないん
だ!!!!」

「わかった!わかっただから俺様が友達一号になってやるから泣くな、

なっ！！!?」

確か、この巨躯の男はロンクス君とか言う名前だったな！！俺が泣いているのを

見て観念したのか、呆れたのか、そんな事はどうでも良いが、確かにロンクス君！

君は言ったな！？今、友達になるって言ったな！！!?

「本当か！？本当に俺の友達になってくれるんだな！！!?」

「ああ！なつてやる！なつてやるから落ち着け、そして俺の脚に擦り寄るな！」

「なら、これは友達の印だ。俺も左腕にはめているから、あんたは右腕にはめてくれ！！」

「ほら、これで良いんだろ！？はめたぞ。それじゃ、気を取り直して北の祠に

急ぐか、もうお前以外の奴は全員、入っているだろうからな。」

【第6話】その男！-受験番号298（後書き）

13話くらいで最終話にするかどうか悩んでいます。
どうしましょ???

ご意見、要望あればなんでも言ってください！
そのリクエスト叶えます（たぶん）

【第7話】 いけにえ入りま〜す！！

木々が生い茂る山道を道沿いに三十分ばかり進んだところに、その洞窟があつた。

その洞窟の入り口の周りには、洞窟の中に入らずに、入り口で話し込んでいる奴や、何やら風呂敷を広げ、商売のような事をしている者もいた。その光景を見てロンクスが言う。

「なんだあ？こんな所でボツ〜つとしゃがって！！あいつ等やる気あんのか！！？」

「嫌々、これはいい作戦だな！！」

洞窟の入り口で待ち伏せして、出て来た所を襲ってブン盗る！！なんと効率的な作戦か！！よし！俺も仲間につて、ん？あいつ等、朝に校庭で暴れていた、五人組の内の四人じゃないか！！？そうなる俺にとつては危険分子だな！！・・・因子か？

「ん？おい、あんた達もここに入りたいのか？つて！お前は！！？」
「チエストおおおお！！」

バッキ！

「ぐっへー！！」

「いきなり何やってんだ！？お前！！？」

「決まってるだろ！？ライバルには皆消えてもらっぜー！俺は何が何でもこの学園に入らなくちゃいけない理由があるんだからな！！」
「理由？」

「ああ、でも流石にこの人数を相手では、俺に勝ち目は無いからな。」

俺は周囲をざっと見渡しながらそう言った。敵の数はおよそ二十人程、俺がついさつき言った。ライバルは皆消えてもらおうと言う言葉に触発されたのか、その全員が全員、俺に向かい敵意を表し武器を構えている。うーん、ヤバイか・・・な。もう一度数えてみよう。えーっと、魔道士四人、戦士十人、神官八人、合計二十二。勝てるわけねーな。

「おい！？トニーがやられたぞ！！？あいつ！あの時の奴だ！！」

「はぁー、・・・これは一号に生贄になって貰うしかないか。」

「おい！そこで何故、俺を見るんだ！？」

「わかるだろ？我が命により動け！ドール！！」

「わかってたまるかぁ！！ってええええええ！！？か、か、体が勝手に動くうう！！」

俺は自分の左腕に装備している腕輪に、精神を集中し手を当てて命ずる。

すると、俺の横に居たロンクス君の体が動き出し、トニー！！っと、おそらく俺が昏倒させた青年の名前を呼びながら、駆け寄ってきた少年の

顔面にその大きな拳を放った。

ドッバ！！

「お、おおい！手加減しろよな。し、死んじまうぞ？」

「おお、おお、俺じゃねえーよ！？体が勝手に！そう、何かこの辺から妙な力が

加わって・・・おい。」

ロンクス君はそう言いながら、グラウンドで俺があげた腕輪に手を触れた。

それでようやく気づいたのか、突然、神妙な顔になり腕輪を舐める様に

鑑定し始めた。そして、それが何か判ったのか、俺の方に静かに振り向くと、

拳を組み合わせ、ボキボキと音を立たせながら、歩み寄って来ようとしていた。

「な、何か問題でもありましたたつか!？」

「無いと思うか?この腕輪は支配の腕輪だろうが!?!?こんなもん着けて俺様を

操るとは、覚悟できているんだろうな、00298番!?!？」

言うが早いか、ロンクス君は俺を殴ろうと飛び掛って来た。が、俺はその拳を

余裕で交わすと、背後に回り込み、背中を思いっきり蹴ってやった。

「ぐううう!てめえ!あの時は手加減していたのか!？」

「はい、どちらも正解!?!じゃあ、わかっているよな。我が命により敵を退ける!

ドール!?!」

ズッバン!

「ぐっはあ!?!」

「は!はは!?!はあ!?!後は頼んだぞ!ロンクス君!?!では、また逢おう諸君!」

「くっそがあ!?!覚えてやがれ!?!00298番!?!」

俺は悔しがる、ロンクス君を一人残し、笑顔で手を振りながら別れを告げる。

ロンクス君、俺は君の尊い犠牲を忘れないよ。

そうして俺は洞窟の中へと足を踏み入れていった。

【第8話】競争だ！！よい、ドンっ！！

洞窟の中に入ってみると、中はわりと広く壁や床が何か硬い物で削られた後がうっすらと残っていた。

どうやらここは人工的に作られた洞窟らしいな。

だとすれば、滅多なことが無い限りは、崩れたりモンスターが出たりする事も

無いだろう。もっとも今回は入学試験にここを使用すると言うことだから、

それに見合ったモノは居るんだろうが……。

「さてと、うんじゃ！最奥の祠までパツパと行くか！！つとその前にクレイブ。」

「きゅっ？」

「我切望するは、嘆きの鞭！」

ピッシ！

うん、いい感じだな。俺はクレイブを鞭に変化させると、試しに近くにあった

先に丸いボールの様な物がついたレバーに向け、鞭をしならせ打ちつけた。

そうするとレバーは中間辺りでスッパッと、綺麗に二つに切断され、カッチリと音を發てた。

それとほぼ同時に何処からか機械の動作音の様な物が聞え始め、唐突に足元の床が

消えた。落とし穴だった様だ。

・・・うん？

「え？おおおお！！！！？？」

スットン！

「あ、危なかった！！もう少しで怪我するところだったな。」

「だ、誰かいるのか！？で、出てこい！！」

俺が落とし穴の底に見事に着地した途端、男の声が何処からともなく聞えてきた。

辺りを見回してみるも、暗くて何も見えないため、その声が何処から聞えて来て

いるのかわからない。とりあえず、・・・無視しとくか。

「くっそ！出てこない気ならこっちから行くぞ！！行くよ！イースさん！？」

「あつ！はい！！」

俺が暗闇の中、男の声を無視したままでいると、男は誰かに声を掛ける。

そうすると直ぐに風鈴が風を受けて音を立てたような声で返事があった。

どうやら、二人居る様だな。

まあ何人居ようが俺には関係ないけど、そう思いつつ暗闇の中に手を前に

突き出すと、俺は感を信じて、前へと歩き始めた。

手を前に突き出したのは障害物が無いかを確認する為だ。

しかし俺は、先ほどの所から数歩進んだところで、異変を感じた。

俺の手に何か柔らかいモノが触れている。

「きゃっつ！?!?!」

「ん？何だ、これは？」

もう一度、その柔らかさを確かめるように手を先ほどよりも突き出し触れてみる。

「いつや！止めてくつ、……ださい!!」

「ど、どうかしたの!?! イースさん!?!」

うむ、これは……、あれだな。

俺はふつと、それが何であるか気づくと、さらに、クレイブの武器化を解き

頭の上に載せると、もう片方の手を、そこにあるであろう、もう一つの膨らみにへと

手を這わせ、両手でその柔らかさを堪能する。……これは、うむ、なかなか……。

「あっつ！っ痛い!!」

「何が痛いの!?! 待っていて今明かりを点けるから!! えーっと、灯れ、光よ!!」

男が言うと同時に今まで暗かった洞窟内が、一気に白い白光に満たされた。

そしてその光が周囲を照らし出すと、俺的には見られたくない状況も照らし出した。うーん、これは、あまり良い状況じゃない様だ、視線が痛い。

「いつや!!」

パン!

明かりで目が慣れると、お互いの姿をはっきりと見えるようになり目の前にいた

女の子と俺の目が合った、その瞬間に女の子は俺の頬に目掛け平手打ちをした。

俺はその打たれた頬を片手で押さえながら、その少女を観察する。肩の下辺りまで伸ばした黒い髪に吸い込まれそうな黒い瞳、そして特徴的な

尖った耳に少女の小柄な体には見合わない巨大な杖を片手で抱えている。

・・・エルフか？

「貴様!! イースさんに何をしていたんだ!？」

「い、いやあ! 君はあの時の女の子と君は・・・青い髪が眩しい魔道士君じゃないか!

こんなところで逢えるなんて奇遇だね!! 君達も祠に行くんだろ!？ どちらが先に着くか競争だ!! よーい、ドンっ!!」

それだけ言うと、俺は直ぐにその場から逃げ出そうと走り出したが、青い髪の魔道士君が俺の前に回り込み、行く手を阻んだ。

「暗闇に紛れて! イースさんに卑猥な行為をするなんて! 許せない! 覚悟しろ!？」

「・・・少々発育不良ではあるが、今後に期待と言うことで、合格ラインだ。

君の彼女は、うん!!」

「ふざけるなあ!!!!!! 我が前方の敵に降り注げ!! ロックっくはあ!!!!」

「アルティさん!？」

ドン!

目の前で呪文を言い始めた青い髪の男に、俺は手加減なしに、男の腹に向かい拳を打ち込んだ。拳を受けた男は腹部を両手で押さえ、地面へと倒れこむ。

その光景を近くで見ていた女の子が、男の名前か？アルティと叫びながら駆け寄ってきた。

呻きつつも何とか俺と対峙しようとしているアルティと言われた男を、俺は見定めるように見てから言う。

「魔道士がこんな近距離で敵に向かって構成を編むなんて、攻撃しろって！」

「言っているようなもんだぜ？」

「ぐうう!くつそ!まだ、まだだ!!光よ!!」

アルティはそう言うと、苦しげに声を上げ、先程からこの一体を照らしていた。

光の白光を俺に向けて破んできた。つち!目が光でくらむ!!

「イスさん!?!今のうちに逃げますよ!!」

「あっ!ハイ!」

「つて、逃げるのかよ!?!お前から仕掛けてきたんだろ!?!あんたが逃げたら

俺が悪者見たいじゃないか!」

「きゅ〜う???」

なんて奴らだ！？こんな所に俺を一人で置いていくなんて！！暗くて何も見えやしないじゃないか！！まったく！えーっと、ライトの呪文って何だったっけ？

「光れ、灯火よ！！」

シーン

あれ？呪文だけじゃダメなのか？そう言えば、さっきのアルティって奴は正確に

ライトの呪文を唱えていなかったけど、呪文は発動していたよな？魔法を使う為には何か他にも必要なものがあるのか？

「どう思う、クレイブ？」

「きゅ？」

【第9話】青い髪の魔道士??（前書き）

この小説を読んでくれる方々?へ

ありがとうございます!

この小説を誰かに読んで頂けているなんてすごいです!

【第9話】青い髪の魔道士??

「ごっほ！ごっほ！ごっほ！ごっほ！」

「アルティさん！？大丈夫ですか！？今、回復魔法を掛けますから手をどけてください。それで痛みは消える筈ですから。」

「ぐはあっ！！ありがとうございます、イースさん。でも良いんだ。

これは魔法では治療出来ないから……。」

イースがアルティに回復魔法を掛けようと押さえている腕を横にずらし傷を

見ると、アルティの腹部は生きている人間とは思えない程に変色し、腐食し始めていた。それを見た瞬間にイースの脳裏に一つの言葉が浮かんだ！！

「こ、これは！？あつ！あなたは！？カーシッド！？」

「は、っはは、正解、この体、あと五年は持つはずだったんだけど、あの男に

体の中に大量の闘気を打ち込まれてね。もうこの体は駄目みたいなんだイース。」

カーシッドとは呪縛を受け理性を失った魂などが、動物や人に宿っているものを言う。

一般的には小動物に取り付いていることが多いが、稀に人に取り付いている者もいる為、

カーシッド・人型、犬型など、そのもとの種類により、名が多少異なる。

カーシッドに乗り移られると、時が立つにつれ体内から徐々に腐食していき

最終的には死に至りアンデットと化し、血肉を求めて命ある者を襲う。

一般的には一度乗り移った体から他に移る事は出来ないの、その体さえ破壊すれば
カーシッドは消滅するが生前、魔道士であつたり神官であつたりすれば宿っている

肉体を破壊しても消滅することはない。

この場合のカーシッドは魂ごと消滅させなければ、人の体を定期的に移動し永続的に力を誇示し続ける。

「だから……君の体をくれないか、イース!!?」

「いつやあ!!!!!」

「って言っているみたいですけど、青い髪の魔道士君?」

「貴様は!?!」

さっきの暗闇から何とか抜け出し光が見える方へと歩いて行くと、嫌がる女の子を無理やり襲おうとしている。青い魔道士君を見つけた。

とりあえず先程の礼ではないが、一撃……じゃなくて、一言注意してやるうと

来たのは良いけど……マジかよ?カーシッド・人型、しかも魔法を使っていた

と言う事は魂を絶たないと駄目なタイプか!?!っち!めんどくせえなっ!!!

「……死にたくなければ、その女を置いてここから退け、人間!?!」

カーシッドは俺を睨みながらそう言つと、逃げようとしていた女の子の腕を
掴んで自分の方に引き寄せると今にも彼女に魂を移動させようとしているのか
体全体に魔力を充実させ準備に入った。

女の子は必死に逃げようとしているが、力では敵わないので逃げられないのか

俺に向かって声を上げて叫ぶ!!

「いつや!!!助けて!!!」

「無駄だ。その人間は我の事を良く知っているようだ。上位カーシッドを

相手にするのがどれだけ無謀かと言つことをな。」

ドツカ!!!

「ぐう!!!血迷つたか、人間!!!」

「さつきから黙って聞いてりゃ!!!誰に向かって言つてんだ!?

この発酵野郎がつつ!!!ものには言い方つてもんがあるのがつ!!!

!!!」

バッスン!!!

カーシッドは静かにその場へと立ち上がると、突如目を見開き口の中から

舌を突き出した。俺に向かいその舌を伸ばし鞭のようにならせ襲ってくる。

気持ちわりいい!!!

「御託は良い、引かぬなら貴様に死を与えてやるつ。」

「偉そうに！！してられんのも今の内だぜ！！」

そう言うが早い俺はカーシッドの自由自在に延びる舌の攻撃を上
手く避けつつ

手の届く範囲まで行くと拳に闘気を集中させ、カーシッドの喉元に
渾身の一撃を

入れる！！

ズン！！

「ぐはあ！！！！」

「クレイブ！！行くぞ！？我切望するは！嘆きの鞭！！」

カーシッドが俺の一撃を受け、うろたえている内に俺はクレイブを
鞭に

変化させると、その乱れ動く舌を鞭を一振りさせ切り取る。

「ぐぎやああ！！」

「おい、ぼつとしてんな！！狙いはあんなんだ、逃げる！！」

「あ、あたしも、え、えっ援護を！！！！」

「光だ！コイツは唯のカーシッドじゃないんだ！！魂まで消滅させ
ないと、

また違う人間に乗り移る！あんたは光魔法とか、なんか使えるか！？
使えないなら俺がここで引き止めている間に、洞窟から人を避難さ
せて使える奴を

呼んで来い！！

「ハッ！ハッ、ハイ！！よ、呼んできます！！」

……使えないのかよ！？俺は思わず、走って行く彼女の後姿
を眺めつつ嘆息する。

その間にも舌を切り取られたにもかかわらずカーシッドは腕や足、更には背中に生えた触手の様なもので襲い掛かってくる。

「くっ。」

致命傷になりそうな物は鞭で切り落とすが、その他の触手までは対応しきれない！

俺の体は徐々に傷だらけになって行く……。

「どうした、人間よ。先程までの威勢が感じられないが？」

「……い・ま、はあ、はあ、はあ、ジユウデン中！！っつだ！！テ、テメも俺に！」

死をプレゼン・トしてくれ、るんじゃ！なかつ……た……のか！？」

「ふっは、はあはあ！！そのやせ我慢も何処まで持つか、楽しみだ。」

貴様はたっぷりと時間を掛けて殺してやる。」

ツズップ！

「っがああああ！！」

迫ってくる、触覚をその場から飛びのいて避けたつもりが、思ったよりも体に

限界が近づいていた為か、避けきれずにカーシッドの触覚が俺の右足に突き刺さる！！

そのせいで、クレイブの武器化も解けてしまい、元の姿に戻ってしまった。

軸足を壊され、武器も無くなった、こう言うのを絶体絶命って言う

のか？

「きゆう!?!」

「あれを使えつて!?! 駄目に決まってる!?! 俺達だけなら良いが洞窟の中には

他にも人がいるんだ。皆死んで俺だけ生き残るなんて後味悪いだろうが!?!?」

しかも、こいつも倒せない。それは無理だ!?!」

つち!?!倒そうと思えば簡単に倒せるが、肉体を滅ぼすだけじゃ解決にならない!?!」

何とか、ここで食い止めて、属性付与か光の加護を使える奴を連れてこないと

いけないって言うのに!?!」

「あんたは其処で何をされているんですか!?! トロールお兄さん!?!?」

そこに居たのは、腕を組み仁王立ちをしたロンクス・スチームだった。

【第9話】青い髪の魔道士?? (後書き)

駄文ですが、温かい眼差しで読んでくれますことを願います。

【第10話】トロールお兄さん再び

「あんたは其処で何をされているんですか！？トロールお兄さん！
！？」

「俺は人間っだ！！ここに居るのは見物に決まってるだろうが！？
言っとくが

支配の腕輪ならもう外させてもらったぜ！受験番号00298番！
？」

「今年の受験生で、良い神官魔道士が一人居てな。そいつに解呪し
てもらった。」

「その神官を連れてきてくれ！！光の加護を！！ぐううう！！」

「余所見をしていられるほど、貴様にゆとりは無い筈だが？」

この私を根本から葬ろうと思っっているようだが、それは思い上がり
と言っものだ！！

例え属性付与、光魔法、光の加護を使ったところで、私の障壁をま
ず破る事は不可能。

私は人間であった時、神官であり魔道士であったのだからな。それ
は愚かと言っものだ。」

「やってみなきゃっつー！！わかんねーだろうが！！」

俺はそれだけ言っつと武器も持たずに体だけでカーシッドに体当たり
しようつと

全身に闘気を漲らせ、身を低くして走り出した。

ドンー！！

「な、何をしゃがるんだ！！てめえ！！？」

「馬鹿野郎が！？死ぬ気か？目覚めが悪いんだよ！！俺様の前で勝手にシリアスに

話を持って行くんじゃないやねーよ！！俺が仕留めてやるからよ。」

俺がカーシッドに体当たりをしようと走りだしたのを見て、ロンクスが慌てて俺を

横から蹴り飛ばす事でそれを阻止する。その衝撃で倒れた俺を見下ろしながら言うと

カーシッドの方へと振り返り、胸の前で拳を合わせ鳴らし言う。

「つう訳で今度は俺様が相手だ。スチーム・ロンクスだ！手土産に覚えとけ！！」

「何が相手であるかと、私が負けることなど有り得はしない。

だが、面白い、我が名はアルティ・エクシオンだ。」

「んじゃ！最初は軽く行くぜ！？」

ドッゴーン！！

・・・俺の聞き違いか？軽く行くって言わなかったか！？大丈夫なんだろうな。

壁突き抜けて、向こう側に飛んで行っちゃったぞ！？

カーシッドは肉体が滅べば、新たな器を探し、乗り移るんだぞ！！！？

「おい！？あんた！！神官が来るまで、そいつの肉体を破壊するなよ！！！！？」

「・・・うん？・・・ああ、わかってる。」

「なんだ！？その間は！！？まさか！忘れていたのか！！？」

「違う！！少しうっかり、していただけだ！！！」

「どつちも、一緒じゃねーか！！？」

ガッタ！！

俺達が二人で言い合いをしていると壁を突き抜けた向こう側の空間で、

カーシッドが体の上に乗っていた岩を除け、立ち上がっている所だった。

なっ！あの攻撃で無傷かよ！？障壁でも張っているのか？

俺は目に意識を集中させるとカーシッドの方に向ける……………障壁も何もない！？

なのにあいつの攻撃をまともに喰らって無傷、体の強度が上がっているのか！？

「くつくく！はっはははあ！！それが精一杯の攻撃か？あまりにも脆弱な一撃な事だな。」

「なんだと！！？俺様の拳が脆弱だと！いい度胸だ！見せてやる。

俺様の本気をな！！！！」

「無駄だ。言つた筈だ何が相手であろうと、この私が負ける事などない！」

私は体をその時々によって変化させることが出来るのだ、このように！」

バッキ、ズップ！ニユチャ！

「ゴウオオオオオ！！！！」

「なっ！マジかよ！？アンデット・ドラゴンか！！？」

【第11話】リス・リスキー唯の巫女よ！

「マジかよ！？アンデット・ドラゴンだと！！？おい、受験番号0298番！？

あれはお前の友達にピッタリだろ？仲良くして来いよ。

俺様は帰るから、なっ！！？」

「なっ！！じゃ、ねーよ！！あんなのと友達になれるか！？あんたの目には俺が

アンデットに見えているのか！？」

嘘だと言ってくれ！なんで入学試験で上級レベルのカーシッドと戦闘して

その上、アンデット・ドラゴンの相手をしなくちゃいけないんだ！？

ここは生徒を入学させる気はあるのか、ないのか！？

とりあえず弁護士を呼んでくれ！弁護士を！！

「ふっふっ、この姿を維持出来るのは、おおよそ40分が限界だ。

それ以上経つと体が崩壊し始めるのでね。もつとも、この姿になった時点で

戦いが終わればこの体は使い物にならないのだがね。さて・・・

そろそろ終わらせて

もらおうでしょうか？」

言い終わるとカーシッドは大きく口を開け、息を吸い込むと口の中から

紅い火炎が見え始めた。おそらくは吐き出すんだろうな！

俺達に向かつて！！ファイアーブレスを！！！！くっそ！ロンクス！？

あいつは戦士だろうから、防御魔法は無理だろうな！！

「ロンクス！！死にたくないなら、こっちに来い！！クレイブ！頼む！！」

俺がそう言うのとすぐにロンクスは、こちらに向かい走ってき、俺の横に滑り込んでくる。

だいぶ焦っているのか慌しく声を荒げ聞いてくる！！

「ファイアーブレスだぞ！！？何とか出来るのか！？こんな密閉空間で！！？」

「出来なきや！！炭になるだけだ！我、切望するは！！漆黒の剣！！」

ゴバーアアアアア！ジュウツドオ　　ン！！

「来たぞ！！？おい！！どうすんだ！？」

「黙ってる！見りゃわかる！！開放せよ！漆黒！！」

ブウォン！！ジュツパ　　ツズーウン！

俺が漆黒の剣を右回りに円を書くように、その場で一回転させると、剣の振るわれた軌跡に黒い霧の様なもの徐徐に広がっていく。

その霧が完全に円形になると、シユオオアッと音を立てて、水溜まりに出来る

波紋のように闇が揺らぐと、数秒にして目の前に迫ってきていた紅い火炎を

飲み込んでしまった。全て飲み込んだのを確認してから俺がもう一度、剣を

今度は左回りに円を書くように振ると、その闇は大气へと霧散し消え去った。

それを俺のすぐ横で見えていたロンクスと、俺と向かい合ってそれを

見ていた

カーシッドの驚きの声があがった。

「な、なんだ！？貴様何をした！！！？」

「ウサギが剣に変身しただと！？」

「なんだ？愚かな人間に尋ねないと、そんな事も解らないのか？」

「ふざけるなアア！！これで終わりにしてくれろわ！！」

「あなたがね！！光よ醜悪なる者へ降り注げ！ホリーアロー！！」

カーシッドはそう言うと、再び口を開けファイアーブレスの体勢に入ろうとした。

その時、俺達とは別の声がそれを遮り聞えてきた！！

声のした方向に振り返ると巫女服に身を包んだ女とその隣には、

さっきの魔法使いの女の子が居た。あれは、あの時の巫女さん！！！！

「ぐぎゃアああ！！」

唐突に響いた声、それが呪文であると判った時には既にその魔法は、カーシッドの肉体に深々と突き刺さっていた。

「やっぱり、魔力を使用する攻撃を繰り出す時は、障壁が解けているよね！！」

「何者だ！？」

「リス・リスキー、唯の巫女よ！宜しく、そしてさよなら！！射抜け、矢よ！！」

リスと言う巫女さんは、それだけ言うとカーシッドの中に深々と刺さっている

矢に対し命令しカーシッドを射抜こうとしたが、それはカーシッドが無効化呪文を

唱えた事に依って消えてなくなった。そしてカーシッドは言う。

「無駄だというのだ。どんなに貴様達が束になって来ようが障壁を破らぬ限り」

私には勝てぬ。事実、状況は覆っておるまい。」

「それならあなたも一緒じゃない、あなたも火炎を放てないでしょう？」

「だから愚かだと言うのだ、私の攻撃方法は何も火を吐くだけではない。」

そう、このように、な！！」

「きゃっつっ！！」

ズガン！

俺は、カーシッドが触手を伸ばす前に、走り出し、巫女とその隣に居た少女を

片手で引っ掴み、その場から飛び退く！！

その直後にカーシッドの体から伸びた触手が二人の居た場所に直撃し、

近くにあった岩盤を粉碎する。その俺の動きを見てカーシッドは感心した様に言う。

「ほう、……まだ動けたのか？」

「っち！……怪我はないな！もう時間が無いんだ、あんた属性付与は出来るか？」

「い、一応出来るけど……。」

「そうか、ロンクス！？時間的に後10分、それでそいつの体の限界が来る！」

その前に何が何でも仕留める！だから2、3分、それだけで言い！時間を稼いでくれ！！頼む！！」

「ロンクス先輩と呼べ！！後輩の癖に俺様に向かって脇役に徹しろとは
いい度胸だ！！やってやる！！3分休憩しとけ！！」

俺はそれだけ言うと、巫女の少女の隣にいる、もう一人の女の子に声を掛ける。

「えーっと、名前なんだった？イーストとかそう言った感じだったよな？」

「・・・イザースです、い、いいつ！イースって呼んでください。」

「わかった、イース。結界張れるか!？」

「ハ、ハイ！！張れます！！」

「じゃあ、ありったけの魔力で結界を張ってくれ！で、巫女さんは俺に光の

属性付与を頼むな!」

「わかったわ、その剣に力を与えればいいのね!」

「いやっ！ちよっと待ってくれ！これじゃない！今から出す！！我切望するは

スピリットブレイカー!!」

ズンッ

俺が片手に持っていた剣を水平に前に突き出し、そう言うと今まで剣であった物は

光を放ちながら細長くなり形を変化させていく。

槍に完全に姿を変化すると、何をしてもなく唯そこに在ると言うだけで、

その槍は異様なほどの圧迫感を放っていた。

本当ならこれは使いたくなかったんだがな・・・っち！ったく!

ブツ飛んだ入学試験じゃねーか！！？やるしかねえ！！！！

「剣が槍になった！？何なのそれ？」

「説明はあと、コイツに属性付与を頼む！それとイースは結界を張って

何が何でも耐える！！！」

「ハイ！！頑張りまっす！！！」

「じゃあ、後で教えてよ！？汝が武具に光の加護与えん！セイントシール！」

「サンキュ！じゃあ、結界張ってここから動くなよ！」

俺はそれだけ言うと、今もなお、カーシッドの相手をしているロンクスに

駆け寄っていく。

見てみるとロンクスは身体中至る所に傷があり吐く息も乱れていた。それに対してカーシッドは先程となんら変わることなくその場に佇み、

数ある触手でロンクスを追い詰め始めていた。

【第12話】スピリットブレイカーって言います！！（前書き）

本日の読者様が80名越えたと言う事で本日は徹夜にてもう一話投稿してしまいました。

調子乗ってすみません、駄文ですが読んでくだされば嬉しいです！

【第12話】スピリットブレイカーって言います!!

「くっそ!!はあ、はあ、まっ、全くう、はあ、効かないってのは・
・

反則だろうっが!!」

「効かない訳ではない、貴様に力が無いだけだ。あの巫女が言ったように

私の障壁は万能ではない。しかし、お前達程度の相手をするには十分すぎる力を

持った障壁よ。よって私は負けないという事だ……もう諦める。

」

「くっそが!!誰が諦めるか!俺様は諦めが悪いんだよ!!」

「……どちらにしる、貴様たちに待っているのは死だ、今一度、宣告しよう。

私が貴様達に死を与えてやると!!」

そう言うとカーシッドは身体中から突き出している触手を束ね左右に二つの

槍を形作った。それをロンクスに向け構え、射抜こうと前方に対峙している

ロンクスに打ち放った!

ジュツパン!!

「グガアアッ!ギョオオン!!」

「ロンクス!!無事か!？」

「……ロンクス、せんっ・ぱい……っと!呼び・やがれ!」

その触手で出来た槍がロンクスにたどり着く前に、俺はその槍の片

方を

切り落とした。

カーシッドは予想外の出来事に狼狽し足を踏み外しその場に倒れた。俺はそれを見届けてから壁にスピリットブレーカーを立て掛けると丸太のように

デカイ腕を両手で掴み、全身に力をいれ、勢いに任せてロンクスの体をイース達が

居る方向へと放り投げた。

「大丈夫みたいだな。じゃあ、向こうに行つてつるおおお!!!」

ポイツ!!!

「ぐっは!!!」

「そいつも結界の中に入れといてくれ!!!」

ロンクスは見事にイースたちの元へと飛んで行き、イースが張っていた結界に

激突した。

イースは慌てて結界を解くと、ロンクスを巫女と二人で安全なところまで

連れて行くと再び結界を展開した。

よっし!これで良いな!あとは奴をぶっ殺すだけだ。

俺は壁に立て掛けていたスピリットブレーカーをもう一度手に取ると大きく深呼吸してから、いつの間にか体勢を立て直していたカーシッドと対峙した。

「なんだ?体勢を立て直したのなら何故攻撃してこなかったんだ、余裕のつもりか?」

「……結果は既に見えている、それならば、ここまで良く足掻

いた貴様らに、

最後のチャンスをやろうと思つてな。その秘策とやらを正面から受けてやるうと

言うのだ。」

「後悔するぜ?」

「ふんっ!ならば見せてみる!その力を!!貴様か私かどちらが滅びるか!!」

「決めようぞ!!」

・・・嘘はなさそうだな、あんた気に入つたぜ!唯の人間だったらだけどな!

でも、これで終わりだ!!

俺は静かにカーシッドに対し頷くと、槍を両手に身構え俺の全ての力をその槍に

注ぐ!!!!!!相対するカーシッドも同じく束ねていた触手を解くと、それを床に

打ち付け体を固定すると、口を開きファイアーブレスの体勢に入る!!!!!!

ピッシ!

「おおおおおつ!!!!!!」

「グバアアアアア!!」

俺達の高まった力で、小さな揺れが洞窟の中の少し開けている場所で起こっている。

その揺れで小さな石が転がり落ちた瞬間に俺達はお互いの力を解放しぶつけ合った!!!!!!

ズズズ!!!!!!ズガーアン!!!!!!

ガッバ！！！！

「きゃっつ！？」

「てめえ！！俺は人間だと言っているだろうが！！何度言えば理解できる！？

この頭に直接叩き込んでやろうかあ！！？つて、あんたはあの時の巫女か？」

「ちよつと！何時まで搦んでいる気！？これが呪いを解いてあげた人間に対する

お礼のつもり！！？」

「あつああ、悪い！」

「い、今は！そんな事をしている場合じゃありません！！彼を助けないと！！！」

そこで初めて、自分から口を開く事をしなかった、イスが声を荒げ言った。

パラ、パラパラ、パラ！

「そこに居るのは、・・・・・・・・・・ロンクス君！！！！！！！！！！！！！！この騒ぎは、

君の仕業か！！？校舎からも光の柱が見えたよ！？」

「エルランス先生！？違うって！！俺じゃねーよ！今回は！！！」

ロンクスがそう言うのを聞いているのか聞いていないのか、そのエルランス先生と

呼ばれた男は地上から飛び降りると浮遊呪文で速度をコントロールしながら、

三人の居る場所に降り立った。

ロンクスはそれを見るとエルランスに向かい、もう一度強く今回は

本当に
俺じゃないと繰り返した。

今回は？・・・いつもこんな騒ぎを起こしているの、あなたは？
リスは深々と

溜息を吐きながらも、視線を見上げるとエルランスに声を掛けた。

「先生？あたしは事情を見ていたので説明したいのですが、宜しい
でしょうか？」

「え、君は？」

「はい。あたしはリス・リスナー、受験番号00181番です。」

「リスナー君、では、説明してくれるかい？ここで起こった事を・・・」

【第12話】スピリットブレイカーって言います…！（後書き）

おやすみなさい。

【第13話】ウサギちゃんの人が居ません!? (前書き)

何を書けばいいのか、思いつかなかったと言う事もありまして、この13話で止めようと決めていましたので、いつもより駄文になっております。

ただ、リクエストありましたので継続したいと思いますので今後とも宜しくお願いいたします。

【第13話】ウサギちゃんの人が居ませんか！？

「はい。あたしはリス・リスナー、受験番号00181番です。」
「リスナー君、では、説明してくれるかい？ここで起こった事を・・・。」

それから、10分ほどで今日起きた、カーシッドとの戦闘について判る範囲で説明した。内容を話し終わると、エルランスは勤めて冷静を装いながらも、

話の途中に出てきたアルティ・エクシオン。カーシッドが名乗った名を

繰り返し呟いていた。それを三人が見ていることに気づくと慌ててそれを止め

もう一度、確認するようにロンクスに聞いた。

「そう言う事が、ロンクス君、そのカーシッド・人型は本当にアルティ・エクシオンと

そう名乗ったのかい？」

「ああ、確かにそう名乗っていたよな？受験番号00298番？つてあいつ何処に行っただ？」

ロンクスがそう言って、コウの事を口にしたので、今の今までその存在を

忘れていたリスはイースと顔を向き合わせると、その事に気づき大声を上げた。

「あつ！…ああ

ツツ！…！！！」

「そ、そうです。ウサギちゃんの方が居ません!?」

「大変よ!?こんな所にずっと埋まってるままじゃ、いくら化け物並みに

強いつと言っても生きていられないわよ!?探しましょう!」

「は、はい!…ウサギちゃん!?どこに居るの!?居たら出てきて!…」

「きゅう」

ピョン!…

「あつ!…ウサギちゃん!…良かった無事で!…本当に良かったよ。」

「あつ!あなたも無事だったのね!良かったわ!」

「何が良いんだ!…?俺は小さい事は気にしない男だが!命を掛けてあんだ達を

助けてやったんだぜ!?それが俺の事を忘れて、井戸端会議開いてんじゃねーっよ!」

そして、一番許せないのはお前だ!」

なんだ、クレイブが見つかっただけで、そんなに嬉しいか!?

なにを至福の一時ってんだ!?俺が居ないのに満足な顔じゃがっただろ!」

俺はすっかりと、この両眼に焼き付けたぜ!」

ピッ

イイイ!…!!!

「うるせえーよ!…!何の音だ!」

「うつそ!…!これってまさか試験終了の笛!」

「そうだぜ!?は、ははっは!受験番号00298番、お前不合格だぜ!」

時間内に証を持って行けなかったからなあ！！はっはは！！」

「ちよつと、待ってよ！！あたし達は証こそ持って行けなかったけどそれ以上の成果を挙げているじゃない！！なのに何で不合格なのよ！！」

「ふ、不合格・・・ですか・・・、私達。」

マジかよ。あんなに必死になって倒したのに、不合格かよ。はっは！まあ、仕方がないか、俺はベストを尽くしたしな。うん、俺満足！！とりあえずは、帰るか・・・。

「はっはは！！落ちちまった物は仕方がないか、よしっ！！帰るぞ、クレイブ！」

「ちよつと、こんな事に納得していいの！？カーシッドが居なければあなたは

確実に合格していたわよ！？こんな不公平じゃない！！そうよね、イース！？」

「は、っはい！！私もそう思います！！」

俺に言われてもなあ？俺にも抗議をしると言うことか？

ゾック！ -

「我切望するは漆黒の剣！！」

俺はいきなり背後に殺気を感じると、すぐさまクレイブをイースから取り返し

武器化させる！！その刹那、既に背後に迫っていた。

フェンシングにでも使いそうなサーベルが物凄い速さで俺に突き出されていた！！

ギヤアン！

「これは・・・、凄い有様だね、紅・蓮くん？」

「ん？あんたは！？あの時のオッサン！！？」

「あ、あなたは・・・ツツ！！！」

一瞬、エルランスが何かを言おうとしたが、オッサンがそれに目配せすると

エルランスは押し黙った。

「つち！そう言う事かよ！！なら負ける訳にはいかねーよな！！俺はもう一度

オッサンを今度は見定める為に見る。年齢は四十代半ばぐらいだろう。

髪はところどころに白髪があり、身長は高くもなく低くもない。しかし体は鍛えてあるようで、服に身を包まれているが肩などが以上に

大きいことが見てとれた。

「老いぼれの癖に無理して大丈夫なのか？オッサン！？手加減はしねーっぜ！？」

「・・・わかってているのなら話は早い、では、再試験だ。紅・蓮君！！」

「私に少しでも触れるか、傷をつけられれば君達全員合格だ。」

「おいおい、そんなに簡単なことで良いのか？俺を見くびると痛い目見るぜ！？」

「大口を叩く、そんな事だけならば幼児にでも出来る事だ。君もそうか？」

「試してみたらっ！どうだ！！！」

そう言いながら俺は、オッサンに向かい大きく跳躍すると、上段から剣を

振り下ろす！

キュイン！カン！

それを簡単に左手に装備していた籠手で受け止めると、一瞬考察してから目を細め言う。

「その年齢にしては良くやる方だ、磨けば光るか・・・？」

「おつらあああ！！考え事してる暇なんかあるのか！？」

ブウォン！ブウォン！！

俺の本気の踏み込みの一撃も、ギリギリのところまで氷上を滑る様に避けていく。

その動きはそれ程早いと言うものではない。

むしろスピードでは俺の方が圧倒しているにもかかわらず、その全ての攻撃を

オッサンは悠々と避けてゆく！！

ブウォン！

「つち！」

「距離をとるだけではっ！！？」

「開放せよ、漆黑！！！」

俺は距離を取るため後方へ飛ぶと、間合いを取るが、すぐに間合いを詰めようと

オッサンが俺へと向かってくる。

俺はそれに対して待ち構えるように立つと、漆黑の剣を右回りに一

回転させる。

その剣の振るわれた軌跡に黒い霧の様なものが徐々に広がっていく。その霧が完全に円形になると、水溜まりに出来る波紋のように闇が揺らぐ。

オッサンは一瞬間合いを詰めるのに躊躇った様だったが、絶対の自信があるのか、そのまま俺の方へと走り出す！

「ちっ！間に合え！！！」

オッサンが俺へとサーベルを一振りしたと同時に闇から突如、大きな紅い火炎が噴出した。

その火炎は俺に向かいサーベルを振り下ろしているオッサンに向かい放たれた。

火炎はすべて飲み込もうと、オッサンへと迫ってゆく！！

俺はそれを確認してから素早く、その火炎に隠れオッサンに近づく！！

オッサンは火炎を防ぐのに障壁を張るので精一杯で、背後に気を向けている

余裕すらないようだ。後ろはがら空きだった！

俺は片手をオッサンの肩に乗せ言う。

「チェックメイトってか？」

オッサンは俺がそこに居たことに驚きもせず、俺の方へと振り返ると笑顔で言う。

「・・・合格だ。紅・蓮くん、ようこそエリシオン魔道法学園に、私は校長の

スミスだ。宜しく。」

「「こ、校長!!!!??」」
そのオツサンもとい校長の言葉に、後方で俺と校長が戦っていたのを見ていた。

イスと、巫女が声を上げた。

校長はそんな二人の驚きの声を受けても平然と受け流し、俺の全身を足の先から

頭まで見てから声を潜め言った。

「足に穴が開いていたのだろうか?もう塞がっているだなんて普通ではないよ、紅君。

「……気をつけなさい。彼らに気づかれでもすれば大変だからね。」

校長がそう言った刹那!俺は体の全身から熱が引くのを感じた。

「んなつ!なんで知ってっつ!」

「騒がない方が良く、気づかれないのか?」

「そんな訳無いだろう!」

「ならもつと気を張ることだ。あの一族は反乱者の血縁と言っただけでも」

その存在を赦さないから……。」

「それどころか、何も知らない君の周りに居た者達をも皆殺しにする。」

「ああ知ってるよ、そんなこと……あの時からわかっている。」

神話の時代から存在する一族。

俺の家族を殺し、俺のとても大切なものを奪った一族。

掟、ただ其れだけのために俺は全てを失った。そしてその俺の家族

を殺した

一族もまた滅び掛けている。

一族の中で一番数が多く、里の守護をしていた俺の一族を滅ぼしたことで

一族の住む里の守りは手薄になり、俺達一族だけが持つ特殊な力。それを欲しい者達に襲われ略奪されている。

零夜は、今何処でどうしているのだろうか、俺が守れなかった彼女は……。

「……………」

ドン！

「痛っ！」

「喜べ！受験番号00298番、お前合格だぜ！？この意味が分かるか！？」

俺様とパチパチ出来るんだぜ？先輩として今から狂鞭をふるってやる！！

後悔しても遅いぜ！さあ、指導開始だ！いくぞ、教育的暴力だ！」

「ちょっと、ロンクス君！？止めなさい！今日も言っただけだろっ？」

生徒でも殴っては駄目だっ！」

「先生、こいつが避ければ良いんだよ！受験番号00298番！！殴られたくなかったら強くなれ！殴られて嫌なら殴り返せ！それが男ってもんだ！」

ズッドン！

そう言うが否や、ロンクスは俺へと拳を大振りしてきた！

俺はその拳も避けもせず腹部で受け止める、があまりにも強い力

により
吹き飛ばされる。

ロンクスに吹き飛ばされたまま起き上がらずに、黙考する。
こんな拳でしか語れない馬鹿に気づかされたのは癪だが、俺は気づいてしまった。

後悔はしても遅いって何年も悩んでいた事が本当に馬鹿らしい。
殴られたくなければ強く、殴られたら殴り返せばいいか……。
……なら奪われたなら奪い返せばいいってことだよな。

その為にはもつと、もつと強くなら無くちゃいけない、この学園で
学んで！

俺は誰よりも強くなる！この学園に居る強者達は当然越える！

そしてロンクスよりも校長よりも！俺は強くなつて、必ず零夜を取り返す。

その為には前に進むんだ！まずはこのトロールだ！

「……はっはは、いっつ、痛い、痛い！あっはは！

確かに後悔しても仕方が無いか。」

「……おいおい、なんだ打ち所悪かったのか？打たれて気持ち
良く

なちまつたのか？」

「あっはっはは！拳でしか語り合えないなんて！やはりあなたの種
族は

トロールですか？トロールお兄さん！」

「てめえ！」

ドーン……！

こうして俺の学園生活が始まった。

ズッコーン!!!!!!

おおおお、やばい回想に入ってるんねえーすまん。

そう言うことで俺は今からトロールと戦いに行くから、続きはまた
今度に。

じゃあな。

【第13話】ウサギちゃんの人が居ませんか！（後書き）

「この先を書けばどうなるものか・・・、休載なかれ。休載すれば道はなし。書き続ければその一筆が始まりとなり、その一筆が話となる。書けばわかるさ。」の精神で書いて行こうと思います。

4名の読者様に見放されないように頑張ります、たいと思います。

【第14話】噴水と亀

「えー、であるからして、この様に戦術的撤退をする事で、ベージ將軍は、

一夜にしてドワーフの大群を殲滅する事に成功したのである。」

ここは東校舎一階にある、八つある教室のうちの一つだ。今この教室に居る人数は

ざつと十五名程度、俺は教室の教卓の前で思いっきり欠伸をすると、俺の斜め後ろで

黒板に書かれている文字を真剣な表情で写しているリスを見やり言う。

「……つまんねー、何だ？俺はこんな昔話を延々と聞くためにここに

入ったんじゃないんだが？これはどう言う事だリス？」

「あたしに聞かないでよ！そんな事！っていうか、少しは真面目に講義を受けたら

どうなのよ？……いえ、無理は言わないわ。でも、せめて机に教科書くらいは

置いときなさいよ。」

リスはそう言い俺を見つめてくると、深く嘆息した。

なんだ、さてはお前、俺に惚れたな？ふっ！まったく俺も罪な男だぜ！

俺がそう独自の世界に入っていると、俺の隣に座っているイースがリスの言葉を継ぎ、言う。

「そうですよ、コウさん！せめて教科書だけでも出してあげてくだ

さい。

エルランス先生がコウさんを見るたびに、いつも泣きそうな表情をされるんですよ？

私はもう、見てられません!!」

「馬鹿か!? イース!! そしたら寝るスペースがなくなるだろうが!?!」

「馬鹿はあんたよ!? ここに何しに来ているの!?!」

ドンツ!!!

今まで俺達の会話の様子を黙って聞いていたエルランスが、教卓を両手で勢い良く

叩くと、俺達三人を強く睨み静かに言った。

「そのの三人!! 中庭の噴水前にこれを持って立っていないさい!」

ねえ、見てあれ!

ん? どれ... あははあは!! 何!? あいつら頭は確かかよ!!

?

あはっははは!! だよね!? 亀もって何しているんだろうね!!

?

二人の男女が遠くから俺達を見やり、こつちに指をさし笑っている。そうだ、確かに俺はここで何をしているんだ!? なんだ! この両手で持っても

圧倒的に重い亀は!!!? 亀なら亀らしく、手のひら大で成長を止めておけ!!

こんな一メートル近くもの体長をした亀なんか俺は亀とは認めないぞ!!

お前のせいで俺はここ最近ずっと筋肉痛なんだからな!!?!

なになに？なんか面白いものでもあんの！？

うん、それがね！あそこに居る一年生が噴水の前で亀を抱えてて、もう30分位は

あそこに立っただまなのよ！！？

あーっあ！あいつ等か！知らないのか？あいつ等入学式に紛れ込んでいた

カーシッド・人型を倒したんだってさ！！

はあー？何が凄いの？それ位、私なら魔法で一瞬よ！？

ちっちゃい！甘い！！それがあいつ等が戦ったのは、唯のカーシッドじゃないんだぜ！？

生前、神官でしかも魔法にも通じていた奴らしいよ！！さっきエルランス先生の

教員部屋の前を通っていたら、中からそう聞えたんだ。

ホントにいー？あの子達がそんなに強いなんて思えないけど、理解できないなあ。

何なんだ！？俺の何がそんなに気に入らないんだ女！！？さっきから俺のことを

舐めるように見やがって！！セクハラだぜ！？しかも理解できないだど？

そんな事言われなくても解ってたんだよ！！俺が教えて欲しいくらいだからな！！

俺は今何故、亀を抱えているんだ！？

「リス？何故だ？俺は何故、亀を抱えてこんな所に毎日立たされてるんだ！？」

「そんなこと、あたしが知る訳ないでしょう！！」

「そうか・・・、同じように毎日亀を抱えているお前になら解るんじゃないのかと

俺は思ったのだがお前にも解らなかつたか、そうか……。」「
「そうよ！！」

俺は本当にわからないと言う様に溜息を吐くと、俺の横で手のひらに丁度良い

大きさの亀を大事に抱えているイースが、俺の様子を見て心底呆れた表情で

声を掛けてきた。

「ほ、本当に解らないんですか！？コウさんはともかく、リスも！？」

「なんだ？イースは理由が解るのか！？」

「はい！亀は適度にお日様の光に当ててやらないと、自分では体温調節出来ないのです」

「すぐに冷たくなって死んでしまふんです！！」

「そ、そう言う事か！！？」

パッパーン！！

【第15話】その亀の名はエリザベス！！

パッパーン！！

「痛うう！！！！」

何しやがんだコイツは！？せつかく謎が解けて気分がすっきりした
って

言うのに！人の頭を亀で殴りやがって！！頭が悪くなったらどうし
てくれるんだ！！

まったく、人が話している時は人の目を見ると親に教えてもらわな
かったのかお前は！？

「・・・痛いです。」

「そんな理由の訳ないでしょうが！あたし達が講義の邪魔をしたか
ら、

エルランス先生はあたし達の事を外に追いやってこの亀を待たせる
事によって

あたし達の羞恥心を煽って二度と授業中に関係の無い話をしないよ
うにしているのよ！！」

「でも・・・亀は、亀は！！！！太陽の光に当ててあげないと、体
温が下がって死んで

しまっんです！！これは本当のことです！！」

「おっ？そこに居るのは298番じゃねーか！？ご苦労さんだな、
毎日大事そうに亀抱えて

つくつく！また怒られてやんの、ぶつぶはっはっは！！」

「おはようございます先輩！！」

「お？何だ今日はえらく低姿勢じゃねーか？いつもそう言う態度なら俺様もお前を
きちんと後輩として扱っ「今日もきちんと話せましたね！良い調子
ですよ！」・・・て？
何だ、それ？どういう意味だ？」

「じ・ん・ご ちゃんと話せていますね。・・・って意味です！
トロールお兄さん。」

ズッコーン！！！！

「・・・お前って奴は俺様を怒らせることに掛けては天才だな！！
！いつペン死んどけ！」
ガーン！

「・・・つぶ、必殺！甲羅シールド！」
ペッキ！

「ん？ぺき？何の音だ？」

「・・・つあ？」

「「あーああー！！！」」

「騒がしいと思つて来てみたら、やっぱり君達だったのか・・・。」

「エルランス先生！？こ、これはっ、えっ・・・。」

「ロンクス君、君まで居たのか？頼むからこれ以上問題はっ！？エ
リザベス！？」

「ん？・・・エリザベス？この逝ってしまった亀のことか？」

「なんて言うかエリザベスって・・・エリザベスって、この亀が？」

「いい名前ですね。・・・あ、愛ですかね？」

「亀に？どんだけよ、それ！ああ、今判ったわ、あたし学校選択問
違えたのね・・・。」

リスは言いながらコウが持っていた。今はエルランスが愛おしそうに抱きしめている

亀に目をやった。・・・この大きい緑亀がエリザベスって、そして自分が持っている亀と

イースが持っている亀に目をやる。この子達の名前は何と言うのだろうか？

「コウ君！！？ど、どうしてエリザベスの甲羅が割れているんだい！？」

「ロンクスです。ロンクスがいきなり亀に向かって殴り掛かって来たんです。」

「おい！？」

「・・・・・・ロンクス君、それは本当かい？」

「いや！ち、違うつて俺がこいつを殴ろうとしたんだけど・・・。」

「亀を殴っちゃったんだろ？」

「お前が亀を盾にするからだろうが！？」

「ああ、そう言う意味で言うなら俺が盾にした！でも、やったのはこいつだから」

「ああ？楽しそうだな！？お前！？」

「開き直るな！よ、よくも僕のエリザベスを殺してくれたね！ロンクス君、コウ君。」

君達も同じ目に合わせてやろうか！！？」

「こ、怖！！！！！」

コウとロンクスはエルランスの怒った顔を見て、二人同時に声を発した。

その表情は授業中に生徒達に見せている優しい顔ではなく、目が合った者すべてを

射殺せるのではないかと思うほど凄まじい目をしており、額のこめ

かみ辺りには
怒りで脈拍数が上がっているのか血管が浮立っていた。

「エリザベス君が淋しくない様に、君と同じ場所へこの子達を送ってるよ。」

「ちょっと待て！エルランス先生！？今さらりとんでもない事を言っただぞ！？」

「ロンクスせんぱあーい！！俺死にたくないっす！！何とかあなただけ死んで

それで丸く治まる様にして貰えませんか？」

「こんな時だけ先輩扱いすんな！俺様がいくら偉大だとしても、この学園の教師に
適うはずないだろが！？」

「・・・エリザベス！！！！」

そう言うが早いエルランスは立ち上がり、エリザベスを噴水の淵に優しく置くと

コウとロンクスが居る方へと向かって走り出してきた！！

「エリザベスウー！！！！！！」

「おおお！！変な名前叫びながら近づいてくるぞ！？」

「い、いや、死でないです！エルランス先生！死んでないですから
！」

「はい！甲羅は割れてしまった様ですが、亀さんは生きてますよ、
先生。」

エルランスが大切に抱きしめている亀、エリザベスを近くで見ている
たリスト

イスはエリザベスがぴくりと動いたのを見逃さなかった。

エルランスはそれが聞こえた瞬間に一瞬にしてリス達の元へ移動す

ると、

亀を自分の顔辺りまで抱えてよく見る。そしてエリザベスが生きて
いるのを

確認すると同時に歓喜の声を上げた！

「ほ、本当だ！？ああ！エリザベス！本当に生きてる！良かったエ
リザベス！」

「た、助かったな、298番。」

「ああ、正直、先生と目が合った瞬間から体が全く言う事を利かな
くなくなった。」

エルランスの歓喜の叫びと同時に、コウとロンクスは安堵感からか、
体中の力が抜け

その場に座り込んでいた。

そしてお互いに目を合わせ、自分が生きている事を確認すると、大
きく息を吸い込み

そのまま溜息として外へ吐き出した。

「はあー。」

今回の教訓は、エルランス先生の亀には手を出さなっただ事だな、は
っは……。

【第16話】初めての課外授業

校門を真っ直ぐに進むと石造りの大きな建物がある、それが中央校舎だ。

中央校舎は四階建てになっており、一階は食堂と購買などになっており、

二階は個人クラス、そして三階と四階は教師達が寝泊りに使用している個人部屋が

ある。その個人部屋が並ぶ中の302号室にコウとロンクスは呼出されていた。

コウとロンクスの二人は黒いローブを着ており、もう一人は真っ白いローブを着た

エルランスだった。

「……こほん！あの時は取り乱して悪かったね。危うくやってしまうところだったよ。」

つと、それよりもロンクス君、コウ君には罰としてエリザベスの甲羅を治す為に

必要な物を取りに行ってもらうから、その間の授業には参加しなくて良いよ。」

「な、なんでこいつと行かなきゃ駄目なんだ!？」

「エルランス先生、正直、俺もこんな危険な奴とは行きたくないです。生きて帰って

来られない気がする。」

「はい、文句は受け付けないよ。二人には此処からキュラレを経由して三番街道を

通って東へ二区画行ったところにある岩山へ向って貰います。

そこで粘着力を持った液体を口から吐き出す獣が居るから、その液体を採取して

持ち帰ってくることに、それ今回の任務です。」

「任務？つて事は、授業は欠席じゃなくて出席扱いつて事か？」

「そうだね、そうなるね。いくら罰だからといっても、授業を欠席させてまで

やらせる気はないよ。それにレン君は新入学生だから任務は良い経験になるよ。

授業にも集中出来ていなかったみたいだから、息抜きには丁度良いんじゃないかと

思ってたね。」

「さっきから言っている任務って何のことですか？」

「え？あーそう言うことが、君はまだ任務のこと知らないか、僕達

が一般的に任務って言っているのは学園外授業だよ。」

「へえー課外授業ね。それにしたらえらく物騒じゃないか？」

「物騒？はっは、レン君それはこの学園で言うところの日常だよ。まあ確かに

他の学園と比べれば普通じゃないけどね。学園に着た依頼を生徒がタダで片付ける。

そんな訳だから依頼は沢山来るからね。1年間に3回の課外授業をこなす事が

進学の条件だよ。」

「へえーそれでギルドは怒らないのか？本来ならギルドに行く筈の依頼がこっちに集中したら向こうは商売にならないだろう？それに依頼をやるにしても費用は要るだろう？無料で大丈夫なのか？」

「それは俺様も気にしていた。任務の時に先生達が支給金をくれるんだが、あれは何処から出ているんだろうってな。」

「任務って言うのは、殆どギルドのそれと変わらない、けど危険度はそれ以上。」

「君達はまだ知らないと思うけど、ギルドは仕事の難易度を5段階のレベルに分けて管理しているんだ。内訳はA、B、C、D、Eとなっていて、A級が最難関、E級が素人でもこなせる初心者向けの難易度になっている。」

「このレベルはハンター達にも適合されていて各々のレベルに合った依頼しか受けられない様になっている。」

「しかしギルドも人手不足だから、そんな事も言ってもらえない依頼は次々に入って来るからね。しかもC級上位の依頼は微妙なんだ、危険度は高いが見返りが少ないって言うパターンが多い、理由は単純なこと、そこから上のレベルの依頼が個人で

対応不可能な難易度が多いからなんだ。」

おいおい！それって！？

コウは内心毒づきながらも、間違いかも知れないと思いエルランスに聞く事にした。

「その個人じゃ対応不可能な依頼が、課外授業として学園に来るってことか！？」

「正解、ただそれはごく少数だよ。殆どは近隣住民の方々や、その他色々な事情がある人達が依頼に来る。学園としては、生徒達の課外授業の場所を提供してくれてしかも少量の寄付までしてくれると言う感じかな。」

「寄付ね？」

「そう、寄付して頂いているんだよ。」

「まあ、言い方の問題だけの様な気もするが、気にしても仕方ないって事だな。」

「じゃあ、レン君も納得したみたいだし、さっそく任務に向かって貰えるかな。」

一応、今回のリーダーは上級生のロンクス君だからコウ君は絶対に指示には従うように、
それでは二人とも気を付けて行ってらっしゃい。」

こうしてコウの学園に入学して、初めての課外授業が始まった。

【第16話】初めての課外授業（後書き）

今後の更新についてお知らせです。

週一ペースにしていきたいと思います。

【第17話】只今イベント準備中です。

ロンクスと校門前で待ち合わせていたコウは、旅の支度が出来るとすぐに校門へと

向かうと、そこにはすでにロンクスが先に来ていた様だった。

「悪い、遅かったか？」

「おう、それでもねーな。俺様が超絶に速すぎるだけだからな。そ
うだエルランス先生が

教員部屋で言っていた通り、今回の任務は俺様がリーダーだ。だから命令には逆らうなよ。」

「・・・ああ、分かっているさ。俺も馬鹿じゃないからな、任務と言
うのなら逆らったり
はしないさ、トロールお兄さん。」

「俺は人間だ！って言うかお前は俺の一つ下の学園で俺が先輩だろ
うが！？少しは敬え！」

・・・そうだリーダーとして最初の命令だ！俺様の事はロンクス様
か先輩と呼べ、コウ・レン！」

「注文の多い事で、じゃあ先輩と呼ばせて貰おうか・・・。」

コウはそう言った後、深く嘆息するとキュラレに向けて歩き出した
ロンクスの後へと

付いていく事にした。ロンクスに着いていきながらコウは一冊のノ
ートとペンを取り出すと

ノートに今日の日付と初めての課外授業（任務）と書き、最後に頭

は意外に良いと書いた。

コウはその次に任務の行き先を書こうとしたのだが、そこで自分が行き先を知らない事に気づいた。

「って言うか、俺は目的地が何処なのか知らないじゃないか！そう言えばエルランズ先生が

言っていたキュラレってのは町か何かの名前か？」

「お前そんなことも知らないのか！？おいおい、キュラレって言うのは町の名前だ。

まさかとは思うが学園がある町の名前も知らないとか言うんじゃないだろうか？」

「エリシオンだろ？エーシャス大陸中心部にある国で、その規模は大陸最大であり

初めて一つの意思で統治された国と言われている。まあ、誰でも知ってる事だな。」

「・・・そ、そうなのか、っと！ごっほん！キュラレと言うのはな。エリシオンから

南東にある町の名前だ。西にオルガノ山脈、東にはルベリア山と、山に囲まれて

いるせいか知らんが、すんげー田舎だ。唯一の救いは鉄鉱石が良く採れるって

事と山の幸に恵まれているって事だけだな。お前は何も知らないんだな？」

「俺はバールの出身だから南側の事はあまり知らないんだが、」

「・・・南？そうなのか。」

「そうだよ。それはともかく、話を聞いていると今日の泊まる場所もあんまり期待出来そうにないんだな？」

「まあな、前に行った時に泊まった宿なんか、俺様が歩いただけで床が抜け落ちて

一階まで落ちたからな。」

「マジかよ・・・気が滅入るな課外授業ってのはさ。」

「はっはは！そうでもないぜ。課外授業ってのは色々イベントが尽きないからな。」

「イベント？」

「ああ、まあ直ぐに嫌って程に分かるだろうよ。」

そう言いながらロンクスは笑うと、キュラレに続く街道へとコウを伴って入って行った。

【第18話】イベント開催！

キュラレに向かう道中の街道、確か名前は一番街道と言う筈だ。名前の由来は

一番最初に出来た街道だからという簡単な理由だ。この街道の他にもあと5本の

街道があるのだが、その他の街道も全て出来た順番に一番から六番までの名前が付いている。

街道はその街道ごとに違った売りがある。

それは強いて上げて言うなら六番街道、この街道はエリシオンからボールまでを

接続している。この街道が6本の街道の中で一番人通りが多い。

その殆どが商売をしている人達であるため、六番街道の周りにはその商売人達が村を作りエリシオンとボールを行き来し商売をしている。

この通りで揃わない物はないと言われる位だ。その為か六番街道は人々で賑わっている。

そしてコウ達がキュラレに向かう為に通っている一番街道、この街道の売りは

エンカウント率の高さだった。

このエンカウントがどこぞのお姫様や魅惑の女性などに会える物であればコウは

何も言わずに笑顔ですつとこの街道に居る事だろう。
いや寧ろ家を建てて暮らす。しかしこう言う者達との出会いで在る
のなら心から
遠慮したいと思う。

現在コウとロンクス、二人の前には4匹の白色の毛並みの大型の猿
がいるのだ。

猿と言うよりかは、オラウータンに近いかもしれない。しかしオラ
ウータンよりも
大きく、体長は2メートル以上あり、体はゴリラの様に逞しく肩か
らだらりと
垂れている腕はとても長く地面に着いている。

名をチャイルドモンキーと言う。

「グウオーン！」

1匹のチャイルドモンキーが遠吠えする様に鳴くと、近くに居た2
匹が一斉にコウ達に
向かい飛び掛つてきていた！
二人はそれを左右に飛んで交わすと、チャイルドモンキーの動きに
目を注視しながら言う。

「コウ！これがイベントだ！フラグ立ちまくりだろ！？」

「立ちすぎだ！つかフラグって、死亡フラグか！？」

原生林の中を突っ切る形で街道を作ったせいか、一番街道は十歩け
ばモンスターに

当たると言うエンカウント率の高さだった。

街道建設工事をしていた当時には国営騎士団が2団隊派遣され、職

人を護衛していたと
言うほどの酷さだ。

それが意味する事は簡単である。もの凄く危険という事だった。

「何が任務だ！？生徒を減らすためにやってるんじゃないよな！？
さつきから

もう二度目だぞ！？チャイルドモンキー出っ放しじゃないかっ！！」

ガッス！

コウはロンクスに対し大声で文句を言いながら、襲い掛かって来た
チャイルドモンキーを

その真上に飛んで交わすと、真下に居る奴に向かい頭に踵落としを
打ち込みむ！！

落下する重力の力も利用し頭上から浴びせた蹴りに、チャイルドモ
ンキーは抵抗もなく

その場に崩れる。

地面に無事に着地し、前方に視線を上げるとロンクスが最後のチャ
イルドモンキーを
素手で殴り倒している所だった。

ズッガ！バツキ！ダン！

「うっし！！絶好調だ！俺様三匹、お前一匹、これが実力の差だ！」

そう言っつて自慢をしているロンクスの、後方の茂みから続々と現れ
て来た6体の

チャイルドモンキーを見て気が重くなっていた。

大きく息を吸い込むとコウは任務と言う名の課外授業、そのあまり

もの厳しさに嘆息した。

「……はあ。」

「なんだ？俺様の實力を見て声も出ないのか？」

「クレイブ！我切望するは、嘆きの鞭！！」

ピッシ！

コウは自分の相棒の名を叫ぶ。

すると胸の辺りがごそごそと動き出し襟首から突き立った長細い耳が飛び出すと

その耳に続いて顔を出したのは象牙色のフワフワの毛に、可愛いまんまるな目をした

クレイブだった。

クレイブは飛び出すとほぼ同時に、青白い光をその身から放ち出すと、光の玉に変化し

そのまま真っ直ぐに垂直に細く伸びて行く、そして数秒後には小さな体は完全に鞭へと変貌していた。

「な？何だそれ！？」

「先輩！そのまま動くな！！！！」

「うっほ！！！！いつ！！」

シュッパーン！

コウはそう言うतすぐさまロンクスの後方に現れたチャイルドモンキーに対し、

鞭を一閃させると真っ二つに切り裂く！！二匹目から三匹目を薙ぐ途中ロンクスに

命中しそうになったが、それはロンクスがその場に慌てて倒れ込む事で交わすと、

鞭は残りの四匹を切り裂いたのだった。コウは最後の一匹を倒した事を確認すると、

ロンクスに向かい笑顔で言う。

「今回は俺の方が多いな先輩 あんまり調子に乗っていると死ぬぞ？」

「ああ！お前のせいだな！っていつかやる気だったろ？」

「・・・褒めるなよ。」

「褒めてねえよ！！訴えてんだよ！つか何だ！それ！？」

ロンクスは両手を前に突き出しそう叫ぶと、鞭から元の姿に戻ったクレイブを

指差しもう一度叫んだ！！

「・・・家畜だ。」

「端折ったな？」

「名前はクレイブと言う、ほらクレイブ挨拶。」

「きゅ」

コウが自分の両手の中に居るクレイブに向かい挨拶を促がすと、クレイブはコウの手を

移動しロンクスの方へと向くと、宜しく！と言う様に鳴いたのだった。

「ああ、もう良いよ！どうせ魔法生物かなんかだろうしな。」

「うなぎちゃんです」

「きゅ」

「うぜえーよ！！！！お前もその動物も！！！！」

飼い主も飼い主ならペットもペットだ！と思いつつもロンクスは

そう叫ぶと

コウとクレイブに背を向けると、肩を怒らせながら地面に当たりつける様に

キュラレに向かい歩き出したのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6832h/>

エリシオン魔道法学園

2010年10月10日16時43分発行